

<翻 訳>

レフ・トルストイ

「教職者たちへの訴え」—(2)—

訳・註 安村 仁志

6

私が何を知っているか、60年にわたる⁽¹⁾ 意識生活において私の目に映るところでロシアに（これまで）何が起こり、いま何が起っているかに限り考えてみましょうか。

神学校⁽²⁾ でも、主教、修道学士や宣教師の間でも、複雑な神学問題に関する巧妙な論議が横行し、道徳的な教えとドグマに関する教えの調和が論ぜられ、教理教説の進化あるいは不変性⁽³⁾、その他種々の宗教上の細かい問題を議論にのせています。しかし一億大衆に宣べ伝えられていること

(1) 本論文は1902年に書かれているので、1828年生まれのとルストイは74歳をむかえているわけで、思索を始めて60年という数字がでてきているのであろう。事実、日記、『懺悔』などをみると思索の歴史をみることができる。

(2) 原文では академія となっているが、訳者は前後の関係から духовная академія として訳した。ロシアの最初のものは17世紀のキーエフ・アカデミーであるが、ロシアにはこの他に3つあった。ペテルブルグ、モスクワ、カザンの神学校である。以上は正教会のものであるが、ペテルブルグにはローマ・カトリックの神学校もあった。

(3) 教会の教理は、基本的には不変である。正教会は、神の真理はいつも新しい形で人間に委託されるとして、それを進化ではなく深化（オリビエ・クレマン）にとらえた上で、常々真理を表明している。しかし、時代の影響や外部からの刺激によりある意味での“進化”を被る可能性があり、“進化”と“不変性”が議論にのせられてきたのである。

は、ただ一つです。すなわち、カザンやイヴェリアのイコン⁽⁴⁾崇拝、聖者の遺体や悪魔⁽⁵⁾への信仰、(聖者の遺体の) 一部をとり出すこと⁽⁶⁾、ろうそくをあげて祈ること⁽⁷⁾、追善⁽⁸⁾等が救いをもたらすものであるとの信仰で

-
- (4) イヴェリアとはグルジアの古名である。イヴェリアのイコンとは次のような意味で奇跡的由来をもっている。つまり、アトス山の聖母マリアのイコンで、9世紀に偶像破壊派からまもるためニカイア市出身の婦人が海に投げ入れたため2世紀の間不明となった。しかし、その後アトスに行きつき、修道士たちに崇敬された。教会堂の王門の上におかれ、その故に《門守りのイコン》とも呼ばれ、このイコンから多くの奇蹟やしるしが生まれた。このイコンの模写品はタンボフ、サラートフ、キシニョフ、トゥーラの町、ペテルブルグ県のウスペンスキー島、モスクワ監督管区の新エルサレムなど多くのところにある。モスクワの奇蹟を起こす聖母マリアのイコンは、17世紀より存在している。
- (5) ここでいう悪魔は *чёрт* (但し複数形となっている) で、英語の *devil* に相当する。小文字の *devil* はデーモンとも呼ばれ、地域や民族によってさまざまな宗教的崇拝や俗信、民話にあらわれてくる。夢魔、呼血鬼、魔女などもそのカテゴリーである。
- (6) 原文の *частицы* が何を指すのか明白ではないが、聖者の遺体、遺品に対する崇敬は初期からあり、遺品やまっていたものなどを大切に作る習慣があった。教会はそうした遺体の一部をその基においた上で建てられた。
- (7) 正教の教義神学では、聖像崇拝に関連して香を焚き、ローソクを立てて祈ることがすすめられている。事実教会ではローソクがあかあかと燃えており、信者たちはローソクを買ってささげるのであり、それが教会の収入源の一つともなっている。家庭でもイコンの前で燈明が焚かれるので、イコンはすすでまっくろになっていることが多い。教会のイコンもすすのため表面が黒くなっており、イコンを研究、調査する時にはまず、すすを薬品で洗いおとすことから始められるほどである。
- (8) 正教会には典礼時に生きている者や死んだ者の名を挙げて祈ることで追善される者の永遠の至福と救いが神の前に有効であるとの信仰があり、その意味において、ここで救いをもたらすものとしてあげられているのである。追善には2通りある。教会にある名簿(古来の二枚折書板と過去帳)によって行なわれるもの(永久追善)と、個々の人の要望で行なわれるもの(そのためには特別の過去帳が出される)がある。ロシアにおいては、追善食という共食の習慣(ある特定の日に、生きている者が故人に供物をしてそれを故人とともに食べる)があるが、その一つは蜂蜜を加えた蜜飯(米や麦)である。教会暦ではそれはキリスト降誕祭前夜からキリスト洗礼祭までのクリスマス週間におこなわれる。

ありますが、それが単に宣べ伝えられ、実際に行なわれているだけではありません。民衆のうちにあるこれらの迷信は、(それに対する)あらゆる侵害から完全な聖域としてまもられているのです。聖者の祭日⁽⁹⁾を祝わないでみなされ、また各戸をまわる、奇蹟をおこすというイコン⁽¹⁰⁾を自分の家には呼ばない、聖イリヤの金曜日⁽¹¹⁾に仕事をやめない、そんなことをし

(9) 聖人に関する聖日の主なものをあげてみると、1月23日ダマスクスのヨハネ、1月27日金口イオアン、3月9日ニッサのグレゴリオス、4月7日ニル・ソルスキー、5月9日ナジアンズスのグレゴリオス、6月14日聖大バシレイオス、7月24日ボリスとグレープ、9月9日ヨシフ・ヴォロツキー、1月14日グレゴリオス・パラマス等である。

(10) イコンの起源そのものが、キリストの顔をおおっていた布にキリストの顔が写し出されたという奇跡的な逸話に関連していることもあってか、イコンには古来より奇蹟を行ったとのいい伝えが多く残っている。病気をなおすイコンとか、涸れた井戸をよみがえらせるイコンとかがあるわけで、先に本文に登場したイヴェリアのイコンもその一種であるが、ここにキーエフ・ペチェルスキー修道院のイコンの奇蹟を紹介しておく。セルギイ某が友人のイオアンから幼い子供への遺産として残された金をあずかったが、手放すことがいやになり、聖母のイコンの前でそのようなお金はもっていないとうその誓いをした。そして、イコンに接物しようとしたのだが、目に見えない力がそれをとどめ、ついに彼は会衆の前で罪を悔いるに至った。かくされていた金はみづかり相続人に戻った。そして聖母の執成しによってか、相続人は2倍の額にして教会建立のために寄付したという。この出来事を記念する祭は3月24日に行われる。

(11) 金曜日というのはキリスト教の初期の段階からイエス・キリストが十字架にかかった日として特別視されていたが、次第にこの日は休息し何もしないでいる日とする習慣が生まれていった。そこから、この日には次のような仕事はしてはならないというきまりができた：女性は妨ぐこと、灰汁を煮ること、下着を洗濯することが禁ぜられ、百性については鋤などで耕すことが禁じられた。こうしたことを破ると将来罰を招くと考えられもした。従って金曜日は、不幸を招く日として、いかなることにもとりかからない日とされるにいたった。(反面、金曜日は結婚や誕生には幸せな日という見方もあった) さらに民衆の間では、金曜日は殉教者パラスケーヴァ(ギリシャ語で金曜日)の名で擬人化された。パラスケーヴァは、自らの日が祝われるかを確かめ、違反者を厳しく罰する。また、パラスケーヴァのもとには、年頃の娘が結婚相手を与えられるようにとの祈りをもってくる。パラスケーヴァはまた豊穡にも影響を与えたといわれる。ストグラーフ(百箇条決議 1551年)にもパラスケーヴァ崇拝と結びついた異教的な儀礼についての言及がある。

てみなされ、——それだけで密告され、迫害を受け、追放の憂き目にあわされるのですぞ。

儀式を行なわないセクト⁽¹²⁾ (宗派)についてはもはや言うまでもないことです。そういう人たちは、集まったり、福音書を読むということだけで裁きを受け、罰せられるのです。そうした行為の結果はこうです。何千万もの人々、国民のほぼすべての女性がキリストなるものがいたこと、キリストがいかなるものであるかということを知らないどころか、聞いたことさえないという状態なのです。そのようなことは信じ難いことです。しかし、それは誰でも確かめてみることでできる事実なのであります。

(一度)聞いてみなされ、主教や神学校卒業生が自らの催す集まりで何を語っているかを。また、彼らの雑誌を読んでみなされ、そうすれば、ロシアの教職者は遅れてはいるものの、福音書の真理が一応生み出され且つ民衆に伝えられている一応キリスト教と呼び得る信仰を宣教していると思われることでしょうが、(その上で今度は)民衆の間で教職者たちのやっていることを見てみなされ。そうすれば、宣べ伝えられしっかり根づいていることはただ一つ、偶像崇拜だけであることにお気づきになれよう。つまり、イコンをかかげること⁽¹³⁾、みそぎ式⁽¹⁴⁾、奇蹟を行なうイコンが

(12) ロシアのセクトは3つに大別されるが、その一つは古儀式派であるので除外すると、残り2つは異端的セクトとしての理性主義セクトと神秘主義セクトのグループである。理性主義セクトには、ドゥホボール教徒、モロカン教徒(これから派生したセクトも含む)、シュトゥンジスト、トルストイ主義、アドヴェンチスト等が属するが、特徴としては儀式を重んじないで合理主義的理念をもつ。神秘主義セクトに属するものは、去勢派、鞭身派である。トルストイはこうしたセクトに対しては寛容的な考え方をもっており、ドゥホボール教徒への援助は有名な話である。

(13) イコンは、教会のイコノスタスなどにつけられ奉神礼において靈的に重要な役割を果たすが、信徒の個人的信仰及び生活とも密接に結びついている。家には居間の隅(ロシアでは“赤い隅”と呼ばれる)に神棚的なところがあり、イコンがおかれ、燈明をあげて祈りが捧げられたりしている。その他、ギリシャなどでは、車の中、店の中、船の中などにもイコンがみられ、一種のおまじない要素がある(身につける小さなもの、旅行用の折りたたみ式のものもある)。

(14) 2種類ある。大みそぎ式(又は主頭節みそぎ式)は主頭節(旧1月6日)の前

家々を巡ること、聖者の遺体を讃えること⁽¹⁵⁾、十字架の携行⁽¹⁶⁾ 等なのです。キリスト教をその本来の意味において理解しようとする試みはといえ
ば、極めて圧迫されているのです。

私の覚えによれば、ロシアの労働者大衆は、以前はその内に生きていた
真のキリスト教の特質をほとんど失ってしまっています。今やそれは教職
者たちによって熱心に追いたてられているからです。

民衆の心のうちには、以前は何世代にもわたって口から口へ伝えられる
キリスト教の伝説⁽¹⁷⁾、 諺が生きておりましたが、今では片田舎に残って

日のミサ又は晩禱の終りに、また主顕節当日はミサが終ってから川や泉や貯水池
で行なわれる。小みそぎ式は、8月1日泉や貯水池で、復活祭第4週の水曜日や
寺院祭礼日にミサの前に、またいつでも信者の希望により家で行なわれる。

- (15) ロシア語で **мощи** というのは、聖者の不朽の遺体というべきものである。こ
うした聖者の遺体に対する崇敬は古くからみられるが、教会の教えにも固定化し、
第5回カルタゴ会議で、いかなる教会堂も殉教者の遺体の上以外には建ててはな
らないと定められた。従って正教の教会はどれも聖者の遺体の一部を有してい
る。ロシアの有名なザゴルスクのトロイツェ・セルギイー修道院は、聖者セルギ
イーの遺体を基いとして建てられたものであるが、聖者であるから不朽である
との民衆の信仰と結びついている（革命後ソビエト政府はそうした信仰を打ち破る
べく、遺体はボロと骨などの塊りと暴露したといわれる）。また、キーエフのペ
チェルスキー寺院の地下カタコンベには、聖者の遺体がミイラとして多数残され
ている。
- (16) 正教徒には洗礼を受ける際に金属性又は木製の十字架が与えられる。この他胸
につけて携行する十字架にはいくつかの種類がある。四辺形の箱（外部は、イエ
ス・キリストの名の組合せ文字があり、中は空）の形をしたエンコルピオン、主
教が携行する十字架で中身のつまったエンコルピオンの変種、長司祭、司祭用の
銀メッキされたキリストのはりつけが入った十字架（1794年パーヴェル帝が定め
たもの）、宮廷付き司祭などに与えられる金の十字架でキリストのはりつけと王
冠のはいった十字架、長司祭や司祭が教区信徒から贈られる十字架、学位を有す
る司祭のもつ十字架（博士、修士等の区別あり）、皇帝ニコライⅡの戴冠時より
司祭に与えられている銀製の十字架などがある。
- (17) いわゆるフォークロアの一ジャンルに宗教伝説（**легенда**）があるが、これは
ロシアの場合シンクレティズムの中で発達した。つまり異教時代の神話などによ
り説明されていたことが、キリスト教の浸透とともにキリスト教的観念や説明に
よってかわられた。そして、キリスト教に基づいた教訓が生まれていったのであ
る。従って必ずしも教会の教えと一致するとは限らず、しばしば外典（アポクリ
ファ）的要素があったり、風刺的であったりした。しかし、大体は民衆の側に立
っている。

いるにすぎません。物乞いの姿をとって歩かれたキリスト⁽¹⁸⁾ についてのいい伝え、神の憐みに疑いをもった天使についてのいい伝え、酒場で踊るユロージヴィ⁽¹⁹⁾ についてのいい伝えや、“何事も神さまの思召し”とか、“神さまは何でもおみとおし”とか、“あすのことを思いわずらうな、今日あって明日なし”といった諺は民衆の霊の糧となっておったのにです。

この他にも、(かつては) 次のようなキリスト教的習慣もありましたぞ。罪人、巡礼者を憐んだり⁽²⁰⁾、貧者にはなけなしのもののなかから施しを

(18) легенда (宗教伝説) に登場する人物は聖者、聖母、キリストであったりするが、ロシアの地を遍歴しながら、民衆(特に貧しかったり、苦しめられている民)の味方として、公正な裁きと懲罰を行うのである。ロシアには、自己を空しうして僕の姿をとられたキリスト(ピリピ2:5-7)にならおうとする信仰(ケノーシス)が発達した。

(19) ユロージヴィについてはよく知られているが、ここではその基本的特徴とその歴史及び最も発達したロシアのよく知られたユロージヴィを紹介しておく。キリストのために痴愚を装うわけで、この世的な幸福、社会生活のあらゆる財をすてる。社会的に当然といえるような行動規範は認めず、この世の人々にも遠慮することなく苦々しい真理を語ったりする反面、無知を装ったりもするのである。その由来は、使徒パウロの言葉(コリント人への第1の手紙4:10,「わたしたちは、キリストのゆえに愚かな者となり……」)にあるようで、キリスト教の初代からそうした風にふるまうものがおり、その中には修道士がいた。聖イシドーラ(4世紀)は最初のユロージヴィであるが、修道女であった。ロシアで最も広まったユロージヴィは、ロシア教会教会暦に多く含まれている(10名以上)。よく知られているものは次の通りである: モスクワの聖ヴァシーリー、ニコライ・コチャノフ、イオアン・ボロヴィツキ(ノヴゴロド)、プロコーピイなど。ユロージヴィは民衆の間で敬意をもって迎えられ、社会正義を体得する唯一のタイプとみられたのである。そのため偽ユロージヴィも数多く現われた。

(20) 訳者の手許には「無名の巡礼者・あるロシア人巡礼の手記」(エンデルレ書店)があるが、これはニコライ一世の統治時代にロシア全土を遍歴した(背にした袋とその中にいれたいく切れかのパン、胸のポケットに入れた聖書のみを財産として歩いた)一農夫の手記であるが、ロシア内外に影響を及ぼした書である。巡礼者は、ロシアでは“僕の姿”をとって地上の生涯を送ったキリストにならおうとするケノーシスが追求されていたこともあって、民衆の間でも巡礼者は暖かく迎えられた。トルストイの小説「幼年時代」、「戦争と平和」にもそうした様子がみられる。

する⁽²¹⁾とか、感情を傷つけてしまった者には許しを請うといった習慣です。

今じゃ、こうしたことはみんな忘れられ、すておかれてしまっておるのです。今では、これらはみな教理問答示教書⁽²¹⁾、神の三位一体性、学びの前の祈り⁽²²⁾、教師やツァーリのための祈り⁽²⁴⁾を諳んじて言えるよう教えることによりとってかわられております。従って、私の覚えによれば、民衆は宗教的にはいよいよ一層大雑把で不作法になっているのです。

女性の大半については、かつては生活を貫いていたあのキリスト教精神すらもちあわせず、600年前と全く同じように迷信にとらわれています。それ以外の女性は教理問答書は諳んじて知っていても、全くの無神論者なのです。こうしたことはみな、教職者によって意識的に生み出されている

(21) 聖書マタイ25章31節から46節には、キリストの再臨に伴う裁きの様子が記されているが、空腹な時に食物を与え、かわいている人に飲ませ、旅人に宿を貸し、裸である時着物を与え、病人を見舞い、獄にいる時訪れるといった具体的な行為がキリストにするようにどのような人にもなされるか否かをもって審判の判断とされている。こうしたことが先に述べたような形でロシア人の中に大切にされていたものであろう。

(22) ざっとロシアのカテヒジスを紹介しておく。(1)ラヴレンチィ・ジザーニィの大カテヒジス(2)普遍的・使徒的東方教会の正教信仰告白(著者はピョートル・モギラ)(3)小カテヒジス(4)大キリスト教カテヒジス(著者は府主教フィラレートなど)がある。また(4)が出版される前には試作の形で、(a)フェオフアン・プロコポヴィチのもの、(b)プラトンのもの、(c)ベリコフ司祭のもの、(d)フィラレートのものが出されている。

(23) 手許にある молитвенник にある молитва пред учением を紹介しておく。Препоблагий Господи, ниспосли нам Благодать Духа Твоего Святаго, дарствующаго и укрепляющаго душевныя наши силы, дабы внимая преподаваемому нам учению, возрасли мы Тебе, нашему Создателю, во славу, родителям же нашим на утешение, Церкви и Отечеству на пользу.

なお、молитва после учения もある。

(24) 正教徒がツァーリのために祈ることはよく知られている。17世紀後半に生じたシスマの結果生み出された分離派のセクトの急進派は、ピョートルを反キリストとみだててツァーリのための祈りを止めたといわれる。

のですぞ。

「ですが、そういうことはあなたがたロシアにおけることです」と、こうした事態に対してヨーロッパの人たち——カトリック教徒，プロテスタント信者——は言うでしょうな。私が思いますには，たとえ（ロシアほど）ひどくはなくとも，福音書を読むことを禁じている⁽²⁵⁾点，ノートル・ダム（聖母像）がある点⁽²⁶⁾でカトリックでも，安息日には聖なる日として何もしない点⁽²⁷⁾，聖書崇拝⁽²⁸⁾，つまり聖書を文字通り盲目的に信じる点⁽²⁹⁾でプロテスタントでも，同じことが起っていますぞ。私は，形はあ

(25) トルストイは，聖書を読むことを禁じることをもってカトリックを問題視しているが，カトリックでは聖書の個人的解釈をさけることもあってか，個々人が聖書を読むよりは公教要理などで養われる傾向があったからであろう。しかし，あまりに断定的すぎるように思われる。

(26) ノートル・ダムとはフランス語でいう聖母マリアのことで，イタリア語，スペイン語のマドンナに相当する。カトリックでは，教会堂の主祭壇の他に，マリアの祭壇もあり，熱心な信仰の対象となっている。教会や地方によって，安産に靈驗があったり，恋愛成就に靈驗があったりする。

(27) 安息日は，モーセの十戒にみられ，天地等の創造の業を六日でおえられた神が休まれた（出エジプト20：11）ことから，聖なる日として何もしてはならないとされた。その後細かい規定ができ，捕囚後は割礼とともに安息日はユダヤ人を異邦人から区別するものとされた。徐々に形式化し，イエスはしばしばパリサイ人たちと安息日論争を行っている。イエスが日曜日に復活したことから，キリスト教では日曜日が聖日（安息日）となった。さて，イギリス・スコットランドで16世紀の宗教改革の副産物として安息日を厳守する運動がおこり，ピューリタンに受けつがれた。そこでは，安息日には商取引や旅行，訪問，接待その他のリクリエーションが禁じられていた。

(28) 原本では *библіолатрія* となっているが，もとはギリシャ語である。書籍崇拝という意味であるが，聖書とか神に関する書に用いられる語であるので正確には聖書崇拝となる。

(29) プロテスタントでは，ルターの聖書中心主義にも見られるように，聖書こそがキリスト教徒の生活と信仰の唯一の規範であるとの確信があるが，一部のプロテスタントには，いきすぎた形として聖書を字句において機械的，迷信的に尊重しようとする傾向があった。そのため，トルストイがここでプロテスタント批判の根拠の一つとしてあげている訳であるが，これは一部の行きすぎに関するものであり，的を得ているとは言えない。

れこれあっても、にせキリスト教界全体にまさにそうしたことがあると思います。

今まで述べてきたことの証明としては、次のことを思い起すことで十分でしょう。それは、教会人のだれも反駁しないことですが、日曜日にエルサレムで燃やされている火についての長年にわたり続いているペテン、プロテスタントという最も新しい形態が特に熱を込めて宣べ伝えている贖い信仰のことです。

7

しかしながら、教会の教義はその非合理性と非道徳性⁽³⁰⁾の故に有害であるだけでなく、その教えを信奉する人たちが自分を抑える道徳的な要求など一つももたずに生きていながら、自分は真のキリスト教的生活をしているのだと完全に信じているという点において、もっと有害なのです。

(そういう) 人たちは、虐げられた貧しい者の労働で自分の財を築き、警備、裁判そして罰をもって自分自身と自分の財産を守りながら、無分別なぜいたくの中で日々暮しているのです——そして教職者も、キリストの名においてそのような生活を是認し、浄め、それに祝福を与えており、金持ちに対しては、収奪することをやめないまま収奪したもののうちわずか

(30) 非合理性はトルストイにとって教会教義に関しても受け入れ難いことであり、本論文にもそうした表現がしばしばみられる。『教義神学批判』をはじめ、『我が信仰はいづこにありや』等にも明らかにされている。また、非道徳性については、トルストイは特に問題視したところであり、本論文でも聖書物語についての言及の中で鋭く批判している。多くの宗教的民話においても、非常に道徳的、倫理的な主張が盛り込まれている。これら二つの問題に共通するところは、人間主義的な神理解に基づくことであるが、それ故にこそトルストイの社会的影響は大きく、共鳴を得るところが大きいのである。正教側には、トルストイ宗とうけとめてそれを理性主義セクトのジャンルに入れる見解もある。プロテスタントの保守主義陣営ではトルストイは冷やかに受けとめられる傾向にあるが、日本でも初期プロテスタントの指導者植村正久、内村鑑三等により新パリサイ主義などと批判を受けている。

の部分をもその人たちに分け与えさえすればいいと勧めているのですぞ。

(奴隷制があった時代には、教職者はいつでも、どこでも奴隷制を正当化しては、それがキリスト教とあわないものだとは考えなかったのです。)

普通の信者が、武器や人殺しの力によって、個人的なものにせよ社会的なものにせよ、自己の貪欲な目的を果たそうと躍起になっているのに対し、教職者もキリストの名において軍備や戦争を是認し、それに祝福を与えておいでです。しかもただ奨励するだけでなく、戦争すなわち人殺しがキリスト教に反するものではないとみて、軍備、戦争を鼓舞することがしばしばあるのです。

この信徒たちは、こうした教会の教えを信じてきたため、その教えによって悪の生活にひきいれられているだけでなく、自分の生活が立派なものであり、自分はそれを改める必要などないと堅く信じているのであります。

しかし、それだけではありませんぞ。この教会の教えの主たる悪はどこにあるかと言え、それがキリスト教の外面的な形態にあまりに巧みに織り合っているために、一般の人たちはそれを信じつつ、あなたがたの教えこそが唯一の真のキリスト教であり、他にはいかなるものもないと思っているということでもあります。あなたがたは、そうした人たちから生ける水の源を奪ったというのではありません——たとえそうだとしても、人々はそれでも見つけ出すでしょうから——しかし、あなたがたはその源をあなたがたの教えによって毒してしまったのです。それ故に、人々はあなたがた流の解釈で毒されてしまった以外のキリスト教は受け入れることができないのです。

あなたがたによって伝えられているキリスト教は、ちょうど天然痘やジフテリアの予防接種のように、接種された人をもはや真のキリスト教を受け入れられなくしてしまふ、偽りのキリスト教の接種なのです。

ほんとうのキリスト教に反する原則の上に自分の生活を何代にもわたってうちたててきた人たちというのは、自分はキリスト教的な生活を営んでいるものと完全に信じきっており、もはやほんとうのキリスト教に帰るこ

とはできないのです。

8 ⁽³¹⁾

以上述べてきたことはあなたがたの教えを信奉している人々の場合についてですが、そういう人たちの他に、あなたがたの教えから免れてはいるけれどもいわゆる信仰のない人々もいるのです。

そういう人たちは、大体的場合、教会の教えを信奉している人たちよりも道徳的にはすぐれた生活を送っていますが、幼い頃に受けたあの心の傷手のために、大半があなたがたの教えを信奉している人々よりも隣人にとっては害が大きいのです。この人たちは、幼い頃にキリスト教界のすべての不幸な人たちと同様に教会のギマンの中で育てられたので、自己の意識の中で教会の教えるところをあまりにもキリスト教本来の教えと結びつけてしまっており、その故に前者と後者の区別がつけられなくなっているのです。また、偽りの教会の教えを棄てるとともに、それと一緒に教会の教えが隠していたあのほんとうのキリスト教の教えをも棄ててしまっており、そのことによって特に有害なのであります。

彼らは、自分が非常な苦しみを受けたあの（教会の教えの）ギマン性を憎むあまり、キリスト教及びあらゆる宗教の無益性だけでなく、その害悪性をもふれまわっているのです。

この人たちの概念によりますと、宗教というものは、かつては人間にとって必要であったが今では害あるのみの迷信の遺物なのです。ですから、彼らの教えによれば、人間はあらゆる宗教的意識から一時も早く、また完

(31) ここでは問題を、積極的に宗教・信仰を否定する無神論者にしばって、そうしたものを生み出した教会・教職者を批判しているわけだが、トルストイのキリスト教観・宗教観が別の意味でよく表わされている。つまり先の道徳的・合理主義的・人間主義的理解でありながらもキリスト教信仰に立った人生観を訴える一方、宗教否定者をもそれが道徳的腐敗を生む要素があるということにおいて鋭く批判しているわけである。従って、必ずしもいわゆる科学的無神論を対象としているものではなく、ニーチェをはじめとする近・現代の一般的宗教否定傾向を対象としているようである。

全に解き放たれば放たれるほど、人間にとって良いということになるのです。

それで、あらゆる宗教からのそういう意味での解放をふれまわっては、彼らが最も教育のある人や学者であるが故に真理を求める人たちの間できわめて大きな権威をもっていることもあって、意識的にせよ無意識のうちにせよ、道徳的墮落の最も有害な宣伝者となっているのです。

理性ある存在のあの最も重要な精神的特性——万物の本源に対する自分の関係をうちたてること——は、確かな道徳的法則がそれからのみ導き出されうるものであり、人間が体得した財産なのであると人々に吹き込むことによって、宗教否定者たちは無意識のうちに人間の活動の基に自己愛とそれから発する肉的淫欲のみを置いているのです。

こういう人々の間には、かつてはあまりはっきりと現われず常に隠されていたけれども、唯物論者の世界観のうちにある潜在的とはいえ本質的なエゴイズム、悪そして憎悪の教え——最近ではニーチェの教説の中に明確にそして意識的に現わされ、人間のうちに最も荒々しい動物的で残忍な本能を呼びおこしつつ、極めて急速にひろまっている——も生まれてきました。

こういうわけで、一方からするといわゆる信者はあなたがたの教えの中に自己の醜い生活が全く是認されているものとしています。なぜなら、あなたがたの教えはキリスト教に正反対のあらゆる行為や状態をキリスト教に合致するものであると認めているからです。また、他方、信仰をもたない人たちはあなたがたの教えのためにあらゆる宗教の否定に走り、善と悪との間にあるとあらゆる差異を拭い去り、人間の不平等、エゴイズム、争いそして弱者の抑圧の教えを人間に許された最高の真理だとしてひろめているのです。

9

あなたがた以外の誰でもありません。あなたがたこそ、強制的に人々に吹き込むその教えによって、人々がひどく激しく苦痛を受けるあの恐るべ

き悪の原因をつくっているのです。

さらに何よりも恐るべきことは、そうした悪をうみ出しておきながら、あなたがたは自分の宣べ伝えているその教えを実は信じていないということです。その教えが成り立っているところの命題の全てを信じている訳ではないということにとどまらず、そのうちの一つだに信じていないということがしばしばあるのです。

私は知ってますぞ。あなたがたの多くは、有名な「credo quia absurdum」⁽³²⁾ を繰り返しながら、実のところは何か何でも自分は自ら宣べ伝えるところのことはとにかく全部信じていると思っている。しかし、あなたがたが自分は、神は三位一体である⁽³³⁾ とか、天国は開かれた⁽³⁴⁾、神の声がかのところから発せられたとか、キリストは天にあげられ⁽³⁵⁾、肉体をもってよみがえる人々をすべて裁くため天から降ってこられる⁽³⁵⁾ といっ

(32) 「我信ず、不合理なるが故に」の意。これは誤ってアウグスチヌスの言葉とされてきたが、知的な理解が信じることの前提ではないという信仰の本来の意味を示すものとして有名なフレーズである。

(33) いわゆる三位一体論についてはトルストイにとって特に理解し難いところであって、『教義神学批判』の中でも、「(神は一にして三、三にして一という) この真理の表現は、私が理解できないのではなく、これは理解し得ないものだということを私が疑いなく理解できるようなものである」(中村融訳) から始めてかなりのスペースをさいて批判している。

(34) 正教の教義神学においても、神の子の降臨まで天国は地上の人間に閉ざされていたが、降臨、死による地獄への降下と死への勝利、そして昇天によって万人のために天の王国への自由なる門が開かれたとされている。

(35) キリストが復活後40日間使徒たちになびたび現われたあと弟子たちの目前で天にあげられていく様子は、「使徒行伝」1章1～11節にみられる。昇天後は父なる神の右に座していると、聖書はマルコ16:19、ローマ8:34、コロサイ3:1、ヘブル10:12他で伝えている。また、信条にも述べられているところである。

(36) キリストは終りの日に(ヨハネ6:40, 44)、大いなるラッパの声とともに御使いをつかわし(マタイ24:31)、死にし者が神の子の声を聞く時が来(ヨハネ5:25)、天より降ってくる。その際には、死人が朽ちない者によみがえらされ、次に生き残っている者が引き上げられ空中で主に会う(第1テサロニケ4:16, 17)と正教の教義神学は述べている。この再臨のこと、その際に裁きがなされることについては、キリスト教界全体の一致しているところである。

たようなことを信じていると言っても、それは自ら語ることが過去にあったとか、これからあるとかということをおなたが信じているということの証明にはなりませんぞ。あなたがたは、自分はそうしたことを信じていると言わねばならないといふことを信じているにすぎず、自分の語っていることが過去にあったとは信じてはいないのです。あなたがたは、信じてはいないのです。それが証拠に、神は一つにして三つにいますとか、キリストは天に昇られ、やがて天より降ってよみがえりし人を裁かれるという主張は、あなたがたにとっては何らの意味ももっていないではないですか。意味のないことばを口にすることはできますぞ、しかし意味のないことを信じることはできませんまい。死者の魂が別の形の生命に移るとか、動物になるということ⁽³⁷⁾、或いは欲情を棄て去り愛するということが人間の使命であるということは信じられましょうぞ。神は人を殺すことを禁じ給うたとか、神は「食べるなかれ」と言われたということも単純に信じることができます。そして自身のうちに内的矛盾を与えない他の多くのことも。しかし、神は同時に一つにして三つにいますとか、我々にとってはもはや無ない天国が開かれているなどといったことは信じることはできませんでしょう。

そういった教義をうちたてた昔の人たちには、それらを信じることができました。しかし、あなたがたにはもはやできないのです。たとえ「私はそれを信じている」と言ったとしても、そう言うのはただ“信仰”という言葉をおある意味において用いているからであって、実のところは別の意味においてなのです。信仰”という言葉の一つの意味は、人間の全生涯の意味を規定し、人間のあらゆる意識的行為を導くところの神と世界に対する人間の定めた関係であります。“信仰”という語のもつもう一つの意味というのは、著名人や大多数の人が伝えるところのことに対する信頼であります。

(37) これらの考え方はキリスト教の正統的信仰にはない。迷信か、他の宗教のことであろうが、トルストイは、たとえそれが迷信であっても人間の素朴な発想の現われとして理解のできるものとしているのであろう。

信仰の対象は、第一義的には、人間の神と世界に対する関係の定義であるということが大体において既に先人たちによりうちたてられたところのものとなっているけれども、理性によって確かめられ、また把握されるものであります。第二番目の意味においては、信仰の対象は理性の関与と無関係に受けとめられているばかりでなく、伝えられるもの確かめるために理性を用いないことを必須条件とするようなところで、受けとめられているのです。

こうして“信仰”という言葉に二重の意味があることに、意味のない、或いは内的矛盾を含む命題を人々が「私は信ず」と言うあの誤解も立脚しているのです。それですからあなたがたが盲目的に自分の教師を信頼しているということも、ナンセンスな、従ってあなたがた自身の判断にとっても、理性にとっても何の意味ももたらさないゆえ信仰の対象とは(本来)なり得ないことを信じているということの証明にはなりません。

有名な宣教師ペール・ディドン⁽³⁸⁾はその書『イエスの生涯』への序言において次のように述べています。「私は、何らかの比喩的な形でではなく、無条件に直接に、キリストはよみがえり、天にあげられ、父(なる神)の右に座しておられると信じている」と。

私の知り合いのサマーラの一百姓は、彼の懺悔聴聞僧が私に語ってくれたところによると、「あなたは神を信じるや」との問に対して、はっきり、決定的に、「私は罪をいっばいもっていません、信じてはおりません」と答えたという。その農夫は自分の神に対する不信仰について、神を信じていたなら今の生活のような暮らし方はしていないだろうということをもって理由としているのですぞ。つまりこうです。人を罵倒したり、物乞いに対し施しを惜しんだり、嫉んだり、人の分までがつがつしたり、飲みすぎたりすること——こんなことが、神を信じているなら果たしてできるだろう

(38) 19世紀後半のドミニコ会士、文筆家で早くから説教師として知られた。科学と信仰の対立に関して問題を提起したり、パレスチナ滞在をもとにしてイエス・キリストについての書をあらわし好評を得ている。福音宣教において大いに力を発揮した。

かというのです。

ペール・ディドンは、「私は神も、キリストの昇天も信じている」とはっきり断言し、サマーラの農夫は、「私は神さまを信じておりません。(なぜなら) 神さまの命じられることを行っていないからです,」と 言 う の で す。

ペール・ディドンが信仰とは一体何かを知りさえせず、「私は信じている」と(だけ)言っていることははっきりしています。(反対に) サマーラの農夫は信仰とは何であるかを知っており、「神さまを信じてはおりません」と言っ て は い る け れ ど も, 真の信仰を形成する意味そのものにおいては, 神を信じているのです。

——つづく——